

「ずさんな危機管理明確に」

父、学校側責任に不満

記 西野 友章

浜名湖のボート転覆事故から1年半、運輸安全委員会は野外活動を受け入れた「静岡県立三ヶ日青年の家」のマニュアル不備をすべきしました。調査結果に遺族は一定の評価をす一方、学校の責任を追究していないことに危機感を抱きます。

私は、朝日新聞の取材に「改めて施設と運営会社の危機管理のずさんさが明確になった。子どもの命を軽く考えていたのではないか。情けない状態で運営されていたと感じた」と肩を落としました。

是正を求める勧告を出した点は「よかった」と評価しました。ただ、調査が事故の物理的原因にとどまったことには危機感を覚えています。運輸安全委の担当者は私に「調査は原因の究明を目的にしたもので、責任追及のためではない」と説明しました。

私は「本当の被害は転覆ではなく、娘の命がなくなったこと」と指摘。調査結果が自然体験教室を引率した学校と豊橋教育委員会に言及していないことに「学校や市教委がいいように解釈して、責任がないと勘違いするのでは」と不安を感じています。「これからも子どもが命を落とさなくなるにはどうすればいいか。その仕組みづくりを議論してほしい」と訴えました。

調査結果を受け、豊橋市教育委員会の宮崎正道・学校教育課長は「運輸安全委員会が指示した調査結果をしっかりと分析したうえで、市教委で作業を進めている事故の再発防止のマニュアルに反映させるものがあれば反映させたい」

静岡県の安部教育長は「県教育委員会としては、今回公表された事故調査報告書の内容を真摯に受け止め、勧告された事項を現在作成中の安全対策マニュアルに反映させるなど、

安全の確保に万全を期したい」とコメントを出しました。

事故を起こさぬ体制つくる

三ヶ日青年の家所長

転覆した手こぎボートを引航していた静岡県立三ヶ日青年の家（浜松市北区）の檀野清司所長は27日、調査結果の公表を受けて、朝日新聞の取材に「調査結果を真摯に受け止め、具体的な対策を検証したい。県教委と一緒に、二度と事故を起こさない体制をつくりたい」と話しました。

事故から1年となった昨年6月にも本紙の取材に応じ、「引航の経験が足りなかったことが事故の大きな要因」と自責の念を漏らしていた。

事故当時、所長は自らが操縦するモーターボートで、生徒ら計20人が乗ったボートを引っ張っていましたが、しばらくして後ろのボートが転覆しました。

檀野所長は、ロープが引航する前、ボートのかじをコントロールするよう教諭に求めなかったことや、ボートに溜まった水を掻き出すように伝えなかったことを告白。「冷静さを失い、（注意が）飛んでしまった」と話した。また、一番近い湖畔は500メートル先だったにもかかわらず、2キロ離れた青年の家に向かったことについて「結果論になるが、近い岸へ着ける選択もあった」と悔やんでいた。

【2012年1月27日朝日夕刊参照】



学校の責任触れず

安全委 施設に従属的

記 西野 文章

愛知県豊橋市章南中学校の私の娘西野花菜（当時12）が犠牲になった浜名湖ボート転覆事故で、運輸安全委が27日公表した事故調査報告書は、悪天候のボートの中でボート活動を自粛しなかった判断を事故原因の一つに挙げたものの、学校側の責任には触れていません。

報告書は、校長ら学校側が天候状況からボート活動を予定通り実施することを不安視していたと認めた上で、指摘しています。「施設側から大雨、雷、強風、波浪および洪水の各注意報が発表されていると知らされ、かつ意見を求められていれば、活動中止を申し入れていた可能性がある」

ボート活動の可否判断をめぐる学校側の立場について、あくまで従属的にすぎないとの前提が読み取れます。

運輸安全委は「学校側は事前の打ち合わせで施設側から『雷でなければ雨でもやる』と説明され、前日と当日にも確認していた。学校の教諭らからすれば、施設の職員はプロ。『大丈夫』と言われるれば、素人である教諭らがそれ以上反論するのは難しい」と説明しています。

「ただ…」と事故調査を担当した調査官の一人が続けました。「施設の職員も経験不足だったということまで、学校側は知らなかったのではないか」。安全対策の不備や指定管理者制度導入時の引き継ぎ不足は、学校側にとつて誤算だったとの見方を示しました。

「原因究明とは言えない」 豊橋の遺族

「花菜ちゃん、ごめん。まだ事故の原因を究明できなかったって言えないよ」。級友から届いた手紙や娘が愛用していたバイオリンに囲まれた居間の祭壇。ほほ笑む娘の遺影を、父親の

私は無念の思いで見つめました。

運輸安全委員の調査官ら3人が24日、私の家に訪ね、108ページに及ぶ事故調査報告書を2時間半かけて説明しました。転覆したボートをえい航した三ヶ日青年の家所長に専門知識がなく、悪天候時のマニュアルは未整備でした。転覆したボートの内側に娘が閉じ込められていたのを見た生徒がいました。

当時の状況が詳細にわかりました。「娘はきつと苦しんだだろう」と思い、私たちの胸は張り裂けそうになりました。

しかし報告書では、花菜や生徒を引率し野外教育を行った豊橋市教育委員会の責任は全く触れられていませんでした。

私は「ボートの訓練が施設の皆さんの運営で行われていたのが分かったことは1つの成果。事故の再発防止を目指すなら、悪天候で大切な生徒を出航させた学校の判断はどうなるのか」と話しました。

「警察の捜査で野外教育として訓練を行った学校の責任も追及してほしい。二度と同じ事故を起こしてはいけないから」そう言葉に力を込めました。

豊橋市教育委員会教育課の宮崎正道課長は「報告書が届いておらず詳細は分からないが、学校はあくまで三ヶ日青年の家の説明を受けて訓練を行ったというのが市教委の見解。ただ今後、事故を受けた再発防止のマニュアル作りは必要」と話しました。

【2012年1月27日中夕刊参照】

